
【Steins;Gate】 変わりゆく日常 二次創作

じじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Steins;Gate】 変わりゆく日常 二次創作

【コード】

N5629Y

【作者名】

じじい

【あらすじ】

シュタイン・ゲート到達後、岡部倫太郎は普通の日常を送っていた。

(前書き)

オカリン視点

シユタインズ・ゲート到達後のお話し

シユタインズ・ゲートにたどり着き、数か月がたった。

Dr. 中鉢に刺された傷は癒え、もうあの永かった3週間は、人生の辛い思い出の1つという感じになってしまっている。

だが俺は「忘れてはいけない、無かったことにしてはいけない」そう胸に刻みこれから生きていく、そう誓った。

だが、ここまで平和だとあれは夢だったんじゃないかと思う時がある。

場所：未来ガジェット研究所

「オカリン？どうかしたの？そんなにニヤニヤして」

「まゆり、放っておきなさい、どうせいつもの厨二病設定でも考えてんのよ」「ペラ

「ま、いつものことっしょ」「カタカタ

ここは未来ガジェット研究所。

ここで人類の未来を左右する研究が行われていたのが今では信じられない。

どっからどうみてもただの学生のみたり場、大学のサークルの部室、よくドラマとかで映される日本の茶の間のような空間。

ような空間というか、まさしくそのまんまな空間である。

そんな空間にサイエンス誌に名前が載るほどの研究者、しかも若干17歳の天才少女、牧瀬紅莉栖がいるのがこの空間の面白いところだ。

彼女、牧瀬紅莉栖は、俺が退院したその日に秋葉原で偶然再会した。用意しておいたラボメンバッチをその場で渡し、そのまま未来ガジェット研究所に招待した。

簡潔に説明しているが、本当は凄く嬉しくて一種のパニック状態だったため、そこらへんの記憶があまり無いというのが本音である。再会した始めの頃、彼女は謝罪と質問の大攻勢をかけてきた。

俺は本当の事を言おうか迷ったが、話すにしてもいきなり「実は、俺はタイムトラベラーなんだ」、なんて言いだしたらどんな結果になるか目に見えているので、「俺が勝手にしたことだ、そう責任を感じることは無い」「体も大丈夫だ、後遺症もない」と大丈夫大丈夫を繰り返し、事を小さい事だとすることに努めた。

それでも彼女が「何か恩返しをさせて欲しい」と言うので、俺は「ならばラボメンとしてこの研究所に力を貸してくれ」と言った。

普通ならラボメンバッチを渡した時点でそうなる流れだが、ラボメンバッチはあの3週間を形として残り、「出来ればラボメン全員に渡せるといいな」くらいの心持ちで用意したため、紅莉栖を未来ガジェット研究所で手伝いをさせるなんて考えてなかったのだ。

結果としてラボメン全員に渡せたが、紅莉栖に渡せたのは僥倖だった。

そして、紅莉栖の返事が「分かりました」。

今いるこの面白い空間が出来上がった訳だ。

「そんなにニヤついていたか…?」

「うん なにかいい事でもあった?」

「狂気のマッドサイエンティストさんともあるうお方が、簡単に感情を顔に出すのはどうなのかしら」

「マッドサイエンティストって、大概狂気の感情を顔に出してる希

ガス」

こんなどうでもいい会話が聞けるのもあの3週間の賜物だと思うと、少し感謝してもいいかもしれない。

紅莉栖はすぐ周りのラボメンと打ち解けた。

ぼっちで@チャンねらーの17歳は、最初こそは言葉使いも態度もすごくカチカチだったが、まゆりの親しみやすさやダルの自重しい言動、そしてこの俺、鳳凰院凶真の精神攻撃によってほどよく調教された。

最初の頃の敬語で話す紅莉栖も色々よかつ…、俺としてはタメ語で話しかけてくる紅莉栖に慣れていたので、作業に差支えが出る前にタメ語で話させるように仕向けた。

今では「ハイハイワロスワロス」などと俺を軽くあしらうレベルになっっている。

(コイツ…助手の分際で…)

そんな事はさておき、これも運命石の扉の選択か、この空間はあの三週間の状態を再現している。

ダルはPCに向き合いエロゲを、まゆりはコス作りを、紅莉栖は洋書を読んでいる。

そして、俺はその様子を開発室のパソコンの前の椅子に座って眺めていたところ、まゆりにニヤけ面を指摘されているという訳だ。

「あ、そろそろバイトの時間だ、まゆしいバイト行ってくるね」

「行ってらっしゃいまゆり」

「あ、まゆ氏バイト?じゃボクもメイクイン行こうかな、フェイリスさんに癒されに」

「ああ、気を付けてな、今日はもうラボには顔を出さないのか?」

「うーん、今日はもう来れないかもだよー」

「ああ、分かった」

「じゃ、行つてきまーす、行こダルくん」

「了解だお」

そう言つて出かけたまゆりとダル。

(この光景、どこかで見たかな?)

あの3週間の影響か、この空間が出来てから既視感がもの凄くするようになった。

少し頭がボーッとするので困り者だ。

しかし、その内しなくなるだろう、だがそれも少し寂しい。

まゆりのバイト先はメイクインニャンニャン。

その店長フェイリスはラボメンだが、最近はラボに顔を出していない。

メイクインが2店舗になったため忙しいらしい、本人も結構意気込んでいた。

「ラボメンたるもの、定期的にラボに顔を見せるのはラボメンの務めだ!」と言つてやりたいところだが、そういう訳にもいかない。

まあ、すこし歩けば顔を見に行けるのだが。

そしてラボは、俺と紅莉栖の二人きりの空間になった。

今は昼を食べ終わり、おやつの時間にしようか迷うような時間である。

(というかダル、あいつ昼もメイクインで済ましてなかったか? まあいい)

俺は今、大学の課題のレポートに取り組んでいる最中だ。

いつの間にかボーッとされていて、気付けばこの面白い空間を見なが

らニヤニヤしていた。

そんな危ない自分に気合いを入れ、PCに向き直り作業を再開した。あと少しだ、パパッとやっつけてしまおう。

紅莉栖は集中して洋書を読んでおり、聞こえてくるのはページをめくる音だけ。

そして俺は資料とのにらめっこしを再開し、パソコンに文章をカタカタと打ち込み始めた。

その空間を時間がゆっくり音を立てずに過ぎていく。

本のページをめくる音とキーボードを打つ音、この音だけが時間が過ぎていく音になっていた。

1時間後、ダルが戻ってきた。

どうやらおやつを食べに行っただけらしい、贅沢な奴だ。

ダルは空気を読んだようで、特に声もかけずにPCの前に座り、またエロゲでも始めたようだ。

そしてまたゆっくりとした時間が過ぎていく。

今度はダルから聞こえてくるクリック音もプラスされて。

しばらくして

「ふう、終了だ」

「ふう…、僕も」

「岡部はいいとして、橋田、HENTAIは自重しろ」

「あれー牧瀬氏、ボク変なこと言った？できればkws k教えてほしいお」

「HENTAIは氏ね」

「それはむしろご褒美だお」

「ダメだコイツ…早く何とかしないと…」

紅莉栖がラボメンになり、他のラボメンに@チャンねらーということがバレるのにそう時間はかからなかった。

こんな風にねらー対応をするので隠しているようには思えなかったが、本人曰く「バレるのは嫌だし、バレるとは思わなかった」とのこと。

なんなんだろうこの助手。

バレーで以来籠が外れたのか外したのか、@チャン語を常用するようになった。

それでいいのだろうか、いやダメだろ。

コンコン

どうやら来客のようだ、来客といってもノックの音で予想はつく。

「お邪魔します」

「お、ルカ氏じゃん」

「あら漆原さん、こんにちは」

「ルウカアー子よ、よく来た！ちょうどいい！今作業が終わったところなのだ、特別にコーヒーでも入れてやろう！」

「え、あ…ありがとうございます、その…ボクも手伝います！」

「岡部ー私もー」「僕もー」

(くっ…こいつら…まあいい)

コンコン ガチャ

「おお！シャイニング・フィンガーではないか！よく来たな、貴様もラボメンとしての自覚が付いてきたようだな！」ウンウン

「お、桐生氏も来た、今日は珍しく全員集合…、あ…まゆ氏とフェイリスたんいないや」

紅&ル「萌郁さんこんにちは」

「こん…にちは…」

「よろしい、シャイニング・フィンガーよ、貴様にもコーヒーを入れてやるう！」

「…ありがとうございます」

ルカ子と萌郁には紅莉栖にラボメンバッチを渡した日と同じ日にバッチを渡している。

萌郁は、このラボの下の階のブラウン管工房でバイトとして働いている。

たまにバイトの休憩時間中に上に上がってきたりする。

最近は上がってくる頻度が多くなっていたりする。

いいことだ。

ルカ子は、最初の頃はラボに行くのが不安なのかあまり来なかった。だが、俺が遠慮はいらんと説得&mp・まゆりがルカ子を連れて来る、を繰り返しているうちにちよくちよく顔を出すようになった。

「ルカ子とシャイニング・フィンガーよ外は寒かったか？」

「そうですね、少し」

「寒かった…」

「なーらーば、このあつあつほかほかのコーヒーを飲んで体を温めるがいいー!」

「岡部ってさりげない優しさがあるわよね、これもツンデレになるのかしら?」

「男のツンデレとか誰得ですか?」

「誰がツンデレだ!」

季節はもう冬。

ラボに顔を出してくれるのは嬉しいが、この季節にラボに来るのは酷だろうか。

あまりそういう事は考えてなかった、ラボのリーダーとして失格か…。

それに、このラボの室内も暖かいとは言えない。どちらかというと暖かい?くらいな感じだ。

「ふむ、これはいち早く対策を立てねば」

「どうしたんですか凶真さん？」

「いや、この寒い中来させてすまないな、無理してこなくてもいいのだぞ？」

「え？そ、そんな、私は好きで来ているんです！無理なんかしていません！」

「そう…だよ…」

「岡部ってそういうところがバカって言うか馬鹿というか…」

「つーか、それなら僕と牧瀬氏にも言うべきじゃね？なぜルカ氏と桐生氏だけに？その二人だけ特別扱いですか？そうですか？」

「ち、違う！断じて違う！特別扱いなぞしていない！少しそう思っただけだ！」

ラボの空気が凍り付いていく、そんなに寒いわけじゃないのに。こんなはずでは無かった、どうやら無粋な気遣いをしてしまったようだ。

ああ、やってしまった。

ルカ子は苦笑いし、萌郁はうつむいたままコーヒーを飲んでいる。

ダルはこっちをチラチラ見るが助け船を出す気配は無し、紅莉栖は洋書で目の下を隠しジト目でこっちを見ている。

どうやってこの場を乗り切ろうか…。

「プリン…」

「え？」

「プリンが食べたいな」

「僕はおでん缶がいいお」

「私…シュークリーム…」

「え？…え？」

俺は事態を理解したがルカ子は戸惑っていた。

「ルカ子よ…食べたいものはあるか？」

「え…悪いですよ」

「いいからいいから」

「えっと…じゃあボクもプリンで…」

「了解した…、おっと！なんとドクペが切れてるではないか！これはいち早く補充せねば！ということだ諸君！俺は少し出てくる」

「小芝居乙」

「いっつらー」

「おみやげ…忘れないでね…」

「すみません…」

そうして買い出しに出ることになった。

どうしてこうなった！…いや、俺が悪いが。

外に出てみると結構寒かった。

この季節白衣じゃ防寒着にならない、そそくさと出てきたため上着もマフラーも付けずに来てしまった。

失敗した。

早いところミッションをこなし戻るとしよつ。

「とりあえずコンビニに向かうか…」

ヒュオオオオオ！

「寒い…」

・
・
・
買い物を終えラボに戻る。

ガチャ

「フーハツハツハツハツハ！鳳凰院凶真！ミッションを完璧にこなし、ただ今帰還した！」

「これは戦利品だ！ありがたく受け取るが…いい…って」

シーン

あれ？誰もいない、どういうことだ？

帰ったのか？にしては急すぎる、しかも人をパシらせておいて帰るのも変だ。

この短時間であの4人が姿を消すとは…。

変だ、というより異常だ。

「…」

あの3週間の出来事がフラッシュバックしてきた。

「…ッ！まさか、ラウンダーの襲撃が！？そんなまさか…」

急いでTVを点けてみる、テロップは出ていないし緊急ニュースもやっていなかった。

（あの時とは違う、妙だ、しかし、本当にラウンダーの襲撃だとしたら…？）

だとしたらどうする、もうタイムリープマシンは無い。

急いで探し出し、助けださねば！

だが、この広い街のどこを探せばいい？

見つけられるのか？助け出せるのか？あの時とは違い鈴羽はいない。

見つけるのも困難だが、助け出すのはもっと難しい。

だがしかし、今は一刻を争う、考えるよりまず行動だ！

そう考え、動き出そうとしたが、そこで少し止まる。

（そもそも本当にラウンダーの襲撃か？扉は壊されていないし、部屋も荒れていない…）

ウ　　ウ　　-

「メール？」

差出人：助手

件名：至急

メイクイーンニヤ
ンニヤンに來い

(どういうことだろうか、助手のケイタイを使った罠だろうか、そもそも何故メイクイーンなのだろうか。)

もしや、ラボにいた全員を拉致し、そしてメイクイーンにいるまゆりやフェイリスを…)
嫌な予感しかない。

(どうする! ?)

至急と書かれていて時刻は書かれていない。

(これはとにかく早く来いと言う事だろうか、何か武器を…)
ラボを見渡すが、武器になりそうなものは無い。

「クツソ!」

走り出すしか無い、全速力でメイクイーンに向かう。

脅迫メールが届いたあの日の時と同じ状況。

嫌な不安を振り切るかのように、ただただ目的の場所へ急いで向かう。

近くにあるメイクイーンがやけに遠く感じた。

あれこれ考えている内にメイクイーンの前についたが、なんのプランも湧いていなかった。

「オカリン、ビックリした？誕生日おめでとうなのです！」

「オカリンオカリン、変なポーズとってないで何かコメントよろ」

「岡部なかなか早かったじゃないの、私のメールにこうも素早く反応するとは」フッフ

「岡部君…お誕生日おめでとう…今日で19…20歳だっけ…？」

「凶真さん！お誕生日おめでとうございます！それに萌郁さん！岡部さんは19歳ですよ！」

「凶真！誕生日おめでとうニヤ！サプライズ大成功だニヤーン！」

俺の想像してたものとまったく違った光景が広がっていた。

クラッカーの飛び散った紐、装飾された店内、何本かろうそくの刺さったケーキ、笑顔のラボメン達。

「みんな…無事だったのか？」

「え、なに岡部？なんでそんな涙目になってんの？ていうか「無事だったのか？」って…」

「嬉しさのあまり錯乱状態なんですわ、分かります」

「オカリン泣いてるの？」

「岡部君…涙もろいんだ…」

f
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5629y/>

【Steins;Gate】 変わりゆく日常 二次創作

2011年12月14日00時53分発行